みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The Potential of Sustainable Tourism at China Lushan as the World Heritage

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 槇村, 久子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002112

中国・盧山の世界遺産と持続的観光開発の可能性

槙 村　久 子
（京都女子大学現代社会学部）

The Potential of Sustainable Tourism at China Lushan as the World Heritage

Hisako Makimura
(Kyoto Women's University)

江西省九江市が京九鉄道の開通により、長江と鉄道との交差地点になったこと、同市郊外の盧山は古文化の名山で1996年に世界文化景観に登録されたことにより、盧山は九江市の観光発展の大きな要因になっている。盧山の観光中心地区は北山で、非常に混雑し、緩和のため南山開発の中で仰天坪リゾート開発計画が進んでいる。「江西省盧山風景名勝区管理条例」や盧山全体計画ができたが、持続可能な視点から、既存地域の収容力限界と今後の観光客増大による環境負荷と環境容量の調整、外部資本による投機的開発の急進性の調整、特に世界遺産登録時に重要要素となった近代洋風別荘建築群の修復・活用保存への早期の開始、環境影響評価の手法が必要である。

China Lushan have much potential of tourism. Because Jiujiang-City is located a crossing the Yangtse River and the Beijin Kowloon Railway, and in 1996 UNESCO included Lushan as World Cultural View in the World Heritage List. The center area of Lushan is the north of Mt.Lushan, and many tourists come to this area. So a new resort area in the south of Mt.Lushan is developping. As a point of sustainable tourism, it is necessary to keep balance between capacity and environmental pollution by increasing tourists, specially to repair and to conservative use villas which are architectural styles of European countries.

1. 研究の背景と目的
2. 研究対象と研究方法
3. 開発可能性と制約条件
4. 江西省九江市の観光資源
5. 盧山の観光資源と開発可能性

6. 「江西省九江市総合開発計画調査」での開発フレームと戦略
7. 廬山の現状と開発計画
8. 「江西省廬山風景名勝区管理条例」と「廬山全体計画」
9. まとめ

Key words: heritage tourism, sustainable tourism, world heritage, cultural property, China Lushan
キーワード：ヘリテージツーリズム、持続的観光、世界遺産、文化財、中国・廬 山

1. 研究の背景と目的

中国における市場経済化の進展の中で、国内における沿海と内陸の地域格差が重要な問題となっている。

1992 年、中国政府はそれまでの沿海開発を重点とする地域開発から、内陸を含む「全方位・多面的開放」へと転換する方針を打ち出した。その最重点項目となった上海浦東開発および長江流域開発は、停滞傾向にあった上海の活性化とともに、国内経済波及効果の高いとみられる対外拠点を国土中心部に形成することによって、国内市場との関連に乏しい華南経済圏の限界を超えることを期待されたものであった。浦東開発の着手以来、上海の発展はめざましい。しかし、その発展は、現在のところ、隣接の長江デルタ地域（江蘇、浙江省）を越えて内陸の上中流地域まで順調に波及しているとは言いがたい。

郷鎮企業の発達による農村工業化と貿易・外資導入による労働集約型工業化の成功したデルタ地域と対照的に、内陸の上中流地域では市場メカニズムの浸透は全国平均に比べても遅れており、今日の中国の地域開発、産業構造の問題点を典型的に集約した形での困難を抱えている。中でも江西省は、中流地方の中でも比較的沿海に近いにもかかわらず、省全体が「京汕低谷」と呼ばれる交通未発達の貧困地帯（南北縦断鉄道京広線と東部沿岸地帯の中間地帯）に属し、旧革命根拠地を中心に、南部地域の農村の貧困は深刻である。

他方中流域には、全国 6 大都市の中心部に位置し、北京に次ぐ物流と広域行政の中心地である武漢があり、その工業集積、技術・人材の蓄積は大きい。江西省北部の九江、景徳鎮、南昌の 3 市を結ぶ工業地帯は、九江長江大橋によって湖北省と結ばれた結果、武漢を中心とする一大都市圏の形成に向かいつつある（図 1 参照）。

既に一定の蓄積がある自動車工業をはじめとする加工組立型工業など、国内市場指向の工業の発展の余地は大きい。さらに、1996 年 1 月に完成した、北京と九龍を結ぶ中国縦断鉄道京九線は、江西省で孤立し、開発から取り残されていた南部農村地帯を北部工業地帯と結びつけ、さらに南部沿海地域へのアクセスをもたらすことになった。長江流

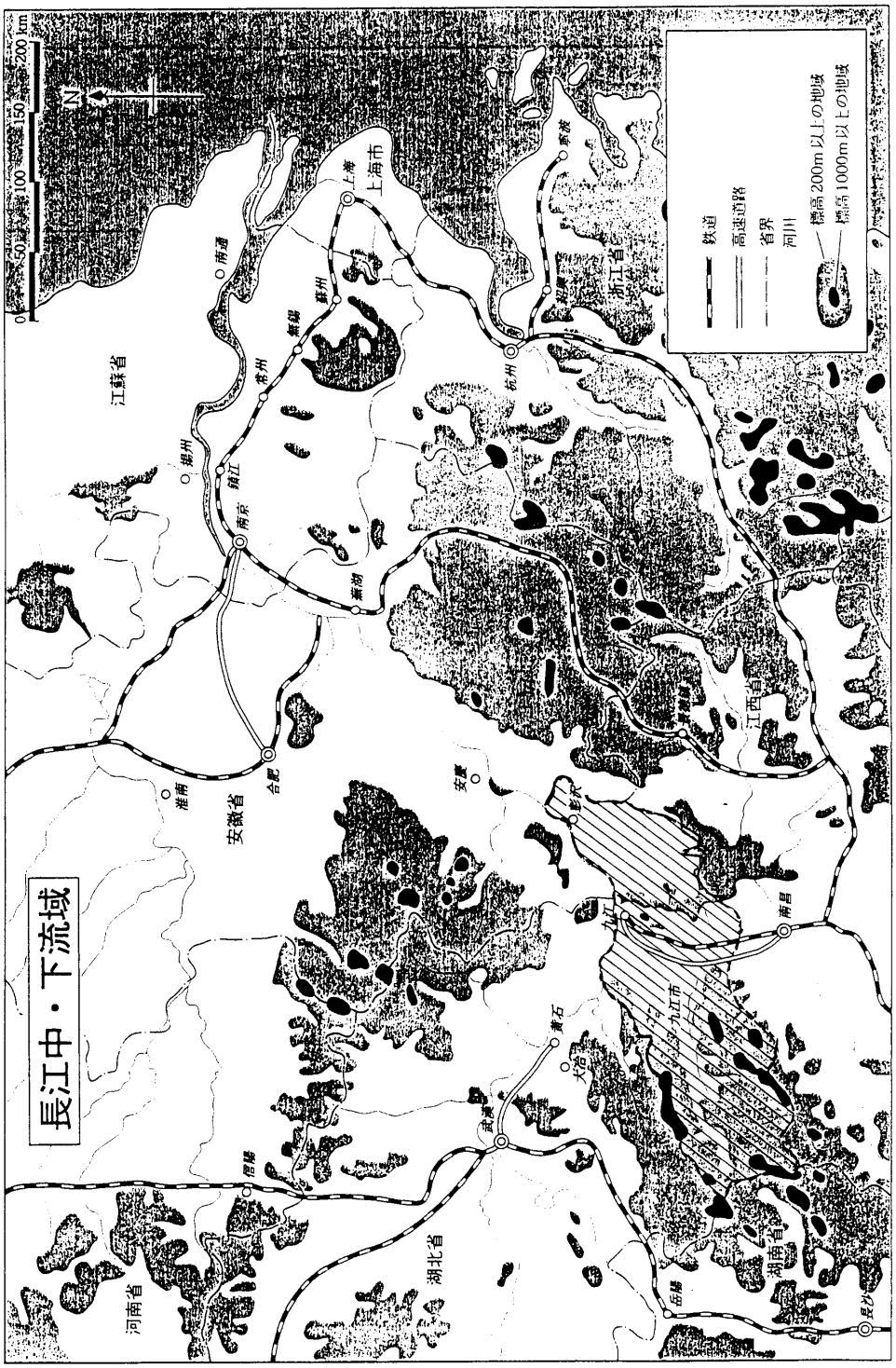


図1　長江中・下流域の主要都市の位置（出典『江西省九江市総合開発計画調査』）

域開発の東西軸と国土中心部を縦断する武漢一香港の南北軸の結節点に位置する江西省の開発は、長江中流域経済圏の形成を促し、今後の内陸発展と地域格差解消の第一歩になる可能性が高い。

本研究の目的は以上の経済的特質と地理的条件をもった長江中流域地方の発展の現状を、江西省の動向を中心に分析し、地域内の貧困を解消しうるような開発の方向と、これを達成するための諸課題を明らかにすることである。特に、国土軸での立地条件を活かした第3次産業の育成のなかで、観光開発に焦点をあて、本稿では持続可能な観光開発の課題を探る。

2. 研究対象と研究方法

上記のように、第3次産業の重要性とその1つとして観光産業があるが、急速な民営化や規制緩和による市場原理の導入が、経済的不平等や社会的公正の後退などをもたらしている。比較的漸進的な移行が進んできた中国でも、沿海の急成長地域では、住民の間での所得格差、土地（使用権）の高騰による投機的投資と住宅難、都市環境の悪化など顕著である。内陸地域は沿海地域のこうした先行的な経験から、急速な市場化による地域内の不平等や環境破壊を最小にする戦略をとりうる条件のもとにある。開発の方向の検討にあたっては、市場と計画、効率と公正のバランスと持続可能な開発を重視し、土地利用規制、環境規制等の施策と、これらを実現する方策などについて、考察する。

江西省を研究対象地域に選び、次の項目について現地調査、ヒアリング、関連統計・文献資料収集をした。

①計画経済期と開放・改革以後の観光産業
②観光資源（自然、文化、歴史）と開発可能性
③九江・廬山、景徳鎮その他北部地域の観光開発の現状（特に廬山について）
④旅行者の特質、企業、地方政府、観光組織、地域住民の役割
⑤観光開発に関する地方政府の政策（江西省、九江市などの観光産業支援、環境規制、土地利用規制）
⑥国際観光の発展と外資系企業の活動の状況
⑦農村地域開発における観光産業育成の可能性（井岡山など）
⑧観光産業における人材の課題と育成の現状
⑨観光産業を支える社会基盤（交通・通信などのインフラ）整備の状況（図2参照）。

調査時期は、1997年8月3日から14日。調査訪問地は華中理工大学経営学院、江西財経大学、九江市人民政府計画委員会、同外資弁公室、同旅游局、九江開発区経済発展

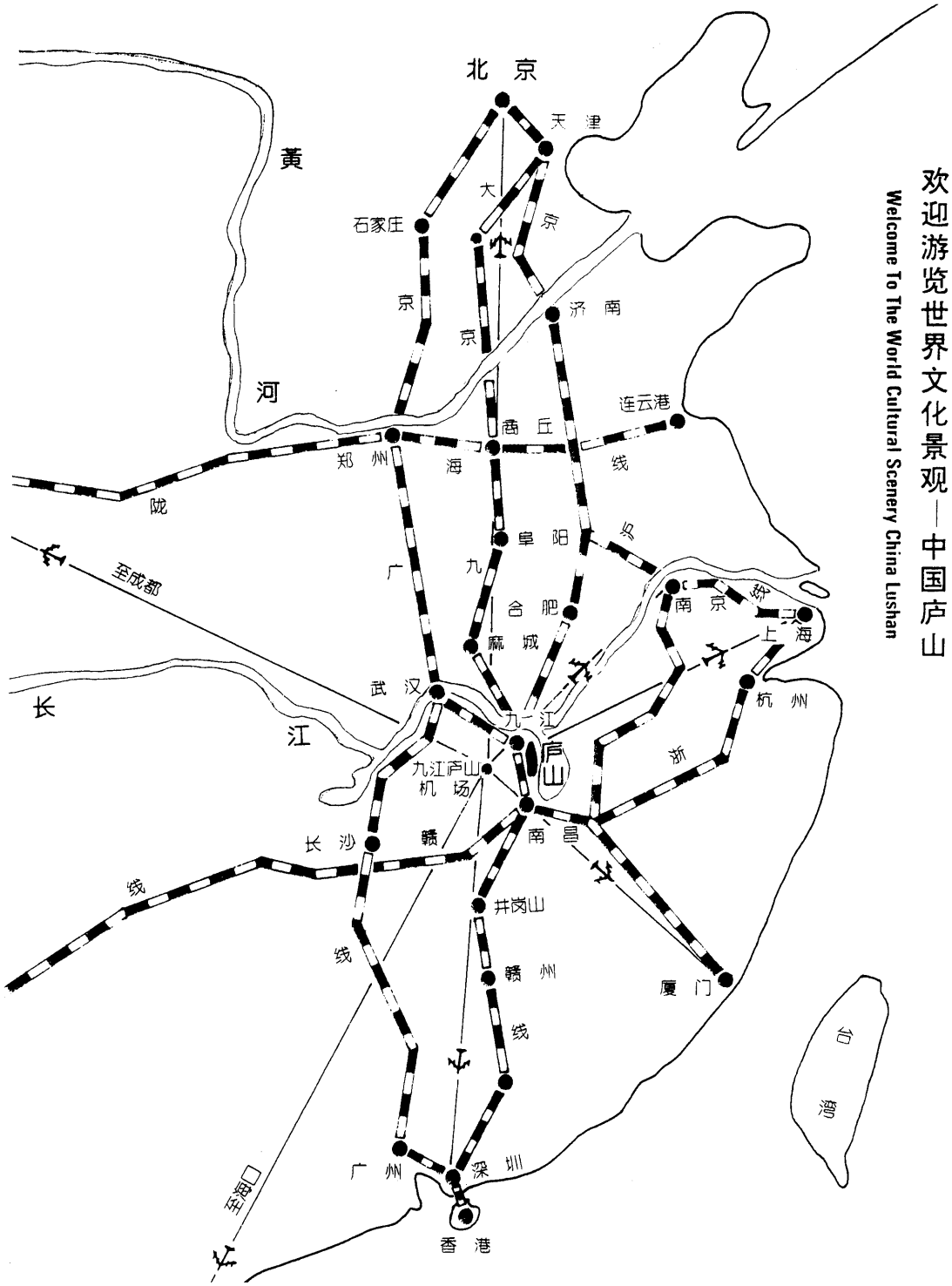


図2　盧山の位置と交通網（出典『世界文化景観・盧山游』）

局、九江開発区管理委員会、九江港務管理局、江西省廬山風景名勝区管理局、同廬山旅游局、廬山中国国際旅行社、廬山中国旅行社、江西省景徳鎮市、鄱陽湖等。

本稿では、これらの調査研究の中から、九江市の廬山を中心とした観光開発の現状と可能性を持続可能な開発の視点から課題を探る。

3. 開発可能性と制約条件

中国は長い歴史と広大で多様な地勢から、世界的にみて観光資源大国である。国務院が指定する国家級風景名勝区が 62 カ所、歴史文化都市が 84 カ所ある（1992 年）。またこれら以外にも重点文物保護単位（重要文化財）、重要寺院、自然保護区の指定がされている。

1991 年 12 月 18 日付けの中国旅游報によれば、中国有識者の投票による中国観光地 40 選では、自然観光地は内陸の山、渓谷、滝などの山岳景観が圧倒的である。江西省では廬山が「古来からある自然観光地」、また井岡山が「新しく開発された自然観光地」に選ばれており、江西省は自然観光地として優位性をもっている。こうした、山水と呼べる観光地は、廬山周辺には、井岡山をはじめ、黄山、九華山、長江三峡、武威山、竜虎山、三清山等有力な観光地がある（国際開発センター 1994c）。

中でも九江市の廬山は、古文化の名山であり、世界文化遺産登録され、観光客が廬山の一部地域に集中し、環境の持続性が問題になっている。

中国国家旅游局は、持続的開発の視点で、中国におけるツーリズムの発展ポテンシャルと制約条件及び戦略について、6 つの発展ポテンシャルと 4 つの制約条件、さらに 7 つの戦略を次のようにまとめている。

第一に発展ポテンシャルとして、①広大な国土にまたがる風景と文化の多様性、②経済改革による経済発展のもたらすインフラの整備、③アジア・太平洋地域の成長と域内ツーリズムの振興、④天安門事件の記憶のうすれ、⑤企業家精神と才能の再生、⑥中国におけるビジネス環境、などである。風景と文化の多様性のなかで、特化したツーリズムとして、少数民族と共に、環境アドベンチャー、エコツーリズムのマーケットはまだ成長していないが、中国での発展可能性は大であると指摘している。

次に制約条件として、①巨大な隅々まで広がった官僚機構、②ツーリストの持つ好ましいイメージの未確立とその確立の難しさ、③人的資源の問題、④アウトバウンド・ツーリズムへの法制の変化の必要性、である。

第三に戦略として、①交通インフラの整備、②ツーリズムの生産性の向上、③ツーリズム関係の法整備とともに、④政府とツーリズム関係の人々との連携と教育、つまりツ

ーリズムの経済的、文化的、社会的、環境的側面の否定的な影響を避けるために必要としている。

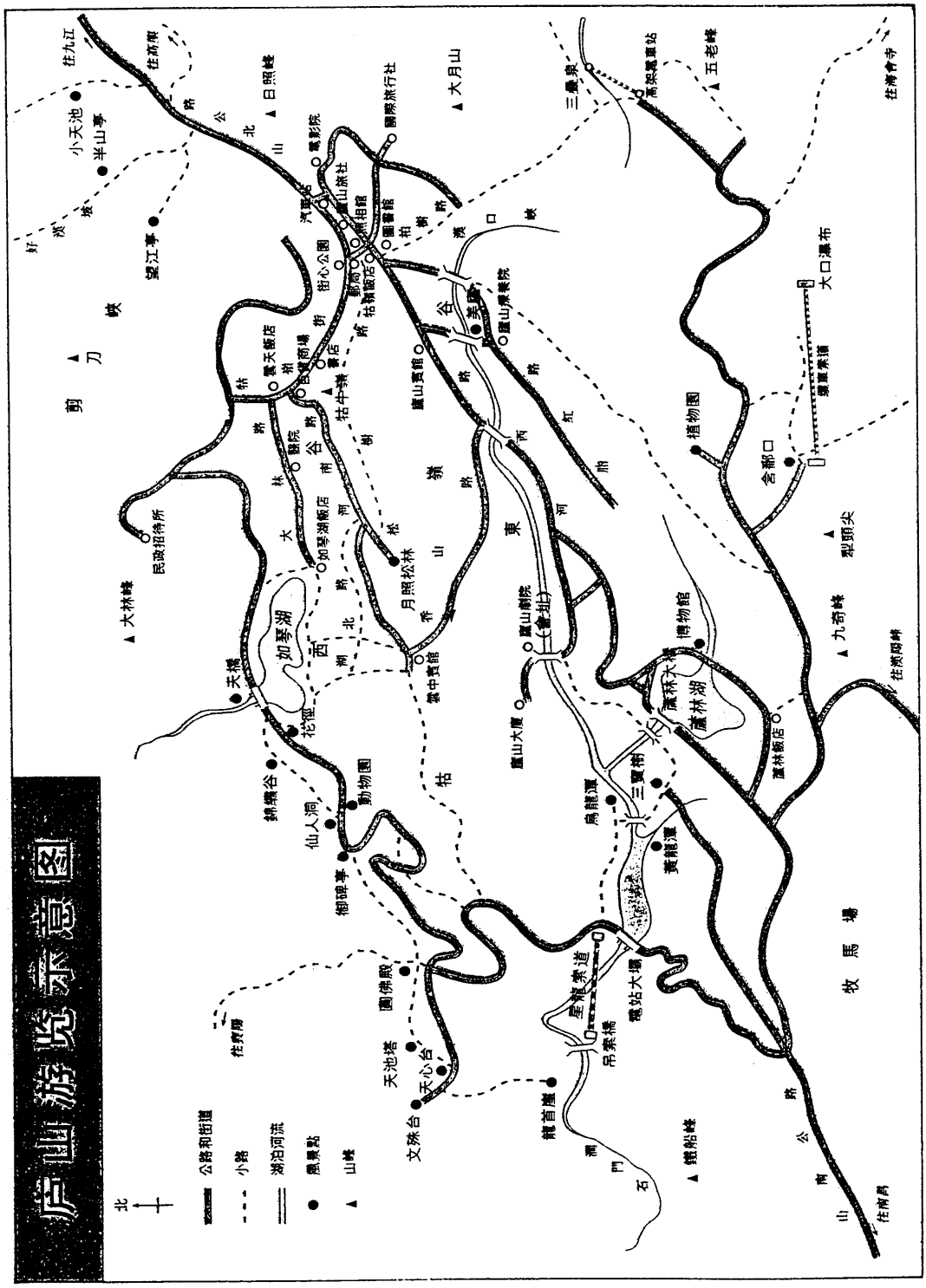
また、⑤国際ツーリズム市場における需要動向の把握をあげ、重要な動向として、先進国における自然や文化資源をベースにしたエコツーリズムの成長が予測されるとしている。そして地域の弱っている環境と文化を保存することに政府の留意が重要であると指摘している。⑥中国の中心地域（従来のツーリズム地域）におけるツーリズム資源の保全では、需要動向に基礎を置いた環境面で持続可能な文化面で充分配慮した開発戦略が中国における資源の評価とその開発においては非常に重要である。⑦旅行者の体験と満足を充足するためのサービス向上のために、さらに大きなステップを踏み出すべき、と指摘している。

4. 江西省九江市の観光資源

九江市は長江中流の南べり、上には湖北、四川に通じて、下には寧波、上海をつなぐ、江西省北の門戸と呼ばれている。廬山をはじめ、6つの景勝管理行政区、2つの景勝地と長江や鄱陽湖の水上の観光資源を持ち、また市内には約300の観光資源がある。九江市内の国家級の観光資源は、廬山（風景名勝区）、世界屈指の淡水湖である鄱陽湖鳥類保護区（自然保護区）、観音橋（重要文化財）、白鹿洞書院（同）、東林寺（重要寺院）、能仁寺（同）、雲居山真如寺（同）がある。なかでも観光資源が集中しているのが廬山の北山山上である（図3参照）。

九江市では、改革開放以来10数年の間に観光旅行業も変化した。市内には国際旅行社、国内旅行者30社、国際観光ホテル19軒、外国人向けの標準的なホテル9軒、合計6000人が宿泊可能である。1996年の国際観光客数は1万8685人、観光収入は653万ドルである。1990年頃まで毎年1万人前後が続き中国の国際旅行市場の発展から取り残された形になっていた。しかし、1994年は1万2082人、1995年1万5791人と増加の傾向にある（九江市旅游局 1997）。しかし、1995年の内訳から見ると、日本からは2805人であるが、香港澳門からが2446人、台湾からが7906人で、台湾が群を抜いて多く50％を占め、日本と澳門を合わせると83％になる。あとは1995年では、イギリス、タイ、シンガポールなどが続くが、毎年の差がある（九江市統計局 1996）。

これに比べて、国内観光客の数は1996年で311万2900人もある。1980年代に入り、改革開放政策のもとで、国内観光客は急速に拡大している。それによる観光収入も10.4億元である。これらの国内観光客の多くが廬山訪れ、特に8月の夏期に入れ込み客数が過剰になる。有名な観光スポットが混雑し、道路の混雑、自動車と歩行者の空間の未分


庐山游览示意图
北
公路和街道
小路
湖泊河流
風景點
山峰
往九江
往南昌
往贛州
往湖口
往南昌
往南昌
往南昌
往贛州
往九江
往南昌
往贛州
往湖口
往南昌
往南昌
往贛州
往南昌
往南昌
往贛州
往南昌
往南昌
往贛州

離による危険、駐車場の問題、宿泊施設の不足、上水の不足、汚水の増大、廃棄物の増大がみられる。

国際観光客を増やすためには多くの課題に対して解決策を講じていかねばならないが、差し迫っている国内観光客の増大に対応して、特に廬山の観光開発と環境負荷を最小にする方法、つまり持続可能な観光開発が必要である。その視点による解決の方向がひいては、国際観光客の吸引にもつながると考える。

5. 廬山の観光資源と開発可能性

廬山は江西省北部、東経 115 度 52 分から 116 度 8 分、北緯 29 度 26 分から 29 度 41 分に位置し、面積は 302 平方キロに及び、主峰の海抜は 1474 メートルの高さである。1996 年 12 月に「世界文化景観」としてユネスコの世界遺産登録されている。

観光資源が最も集積しているのは廬山北山の山上で、自然観光資源、人文観光資源と観光施設がバランスよく分布している。瀑布や奇岩と四季折々の景観、近現代史の舞台の跡、歴史文化財、宗教的有名地、歴史な別荘建築群、野外レクリエーションの場、登山とアウトドアスポーツの場、リゾート宿泊地など多様な観光資源の集積がみられる。

廬山は、古来から現在に至るまで、山水の魅力を備えた名勝として知られ、中国の伝統に沿ったその要素は、多くの文人墨客、僧、武人などを引きつけてきた。特に世界文化景観の名が示すように、峰、奇岩、瀑布、深い谷にかかる霧や雲と楼閣の一体の景観は水墨画を見るような、廬山が古来から持っていた観光資源である。これには、五老峰、香炉峰、秀峰等の山岳、龍首崖等の奇岩、大天地、小天地、三畳泉等の滝、黄龍箪、錦秀谷などの渓谷、芦林湖など湖、展望地点などである。また歴史文化財として白居易草堂、また古代四大書院である白鹿洞書院の建築はは国家級重要文化財である。宗教施設では仙人洞、東林寺などがある。

こうした中国的な観光資源群だけではない。世界遺産登録にも大きな要素となった、近現代の足跡が建築群として残っているのが大きな特徴である。清朝末期以降、中国に在留した西洋人の避暑地として廬山が観光開発されたことで、自然景観の中に石造りの別荘建築群が点在する景観を形成している。上海のハイカラさを思わせる古き良き避暑地時代の面影を残している。アメリカ、ロシア、フランス、ドイツ、フィンランド、オランダ、オーストリア、イタリアなど 20 か国約 1000 の別荘があり、異なる建築様式を見ることができる。

また、当時の西洋人たちの集まる避暑地は、中国の近現代をつくった政治家や軍人も滞在し、重要な歴史的舞台となった建築を残している。中でも廬山会議跡の建築、蒋介

石の美廬別荘、また毛沢東住居跡もあり、新しい観光資源になっている。以上の歴史的な自然、人文的観光資源に加え、近年はキャンプ、登山、ハンググライダー、サイクリングなどスポーツ・レクレーションとしての利用がある（図4参照）。

さらに廬山は海抜が高いため積雪が観光資源になっている。近年の国際観光の流れで台湾、マカオ、香港、ＡＳＥＡＮ地域から最も近場で雪を見れるために観光客が訪れている（魏朝卿 1993；江西省廬山風景名勝区管理局 1996）。

6. 「江西省九江市総合開発計画調査」での開発フレームと戦略

江西省九江市人民政府と日本の国際協力事業団が共同で1992年から1994年にかけて九江市の総合開発計画調査を行い、7巻の分野別計画書をまとめている（国際開発センター 1994a、1994b、1994c、1994d、1994e、1994f、1994g）。その「中華人民共和国江西省九江市総合開発計画調査」の第3巻「観光計画」では、次のような分析と提言が行われている。

九江市は知名度が高く、独特の景観、歴史、歴史的文化財、西欧的な異国情緒とを合わせ持つ廬山を抱えている。会議開催地としても有名で、会議運営のノウハウも蓄積している。廬山は九江のシンボルとしても人材交流拠点としても、今後の九江の開発全体に重要な意義を持っている。しかし、制約条件としてつぎの2点が克服されなければならないと指摘している。

つまり、第1に、国内客に偏り、かつ夏季への集中が著しいこと。第2に、宿泊施設等の多くがバラバラに個別の企業、官庁組織に内部化されていることや、観光関連行政が弱体なこと等のために、対個人への観光サービスの質が低いことである。以上のことから、同計画書は計画の基本コンセプトを「通年型国際コンベンションリゾート」とし、以下の目標と戦略を提言している。

3大計画目標：①市場競争力の強化、観光業の高収益化、②季節変動の平準化、

7大開発戦略：①廬山の「洋」的イメージの演出、②新たな観光アトラクションの開発、③旅行環境の改善、④九江市旅游局と江西省廬山旅游局とに分かれている観光行政の一本化とマーケッティング機能の強化、⑤自然環境と観光資源・景観の保護、⑥コンベンション都市化推進、⑦国際観光の振興そして、以上の7項目の開発戦略を具体化するため、次のプログラムを実施することを提案している（図5参照）。

①廬山の近代洋風建築群の動態保存、②廬山環境施設整備（上下水、ゴミ処理）、③廬山南山開発、④日帰り観光拠点の整備（ 陽湖畔、九江市街地に点在する観光地点の一体的整備）、⑤観光エンターテイメントとイベントの開発、⑥産業観光の推進、⑦全市的

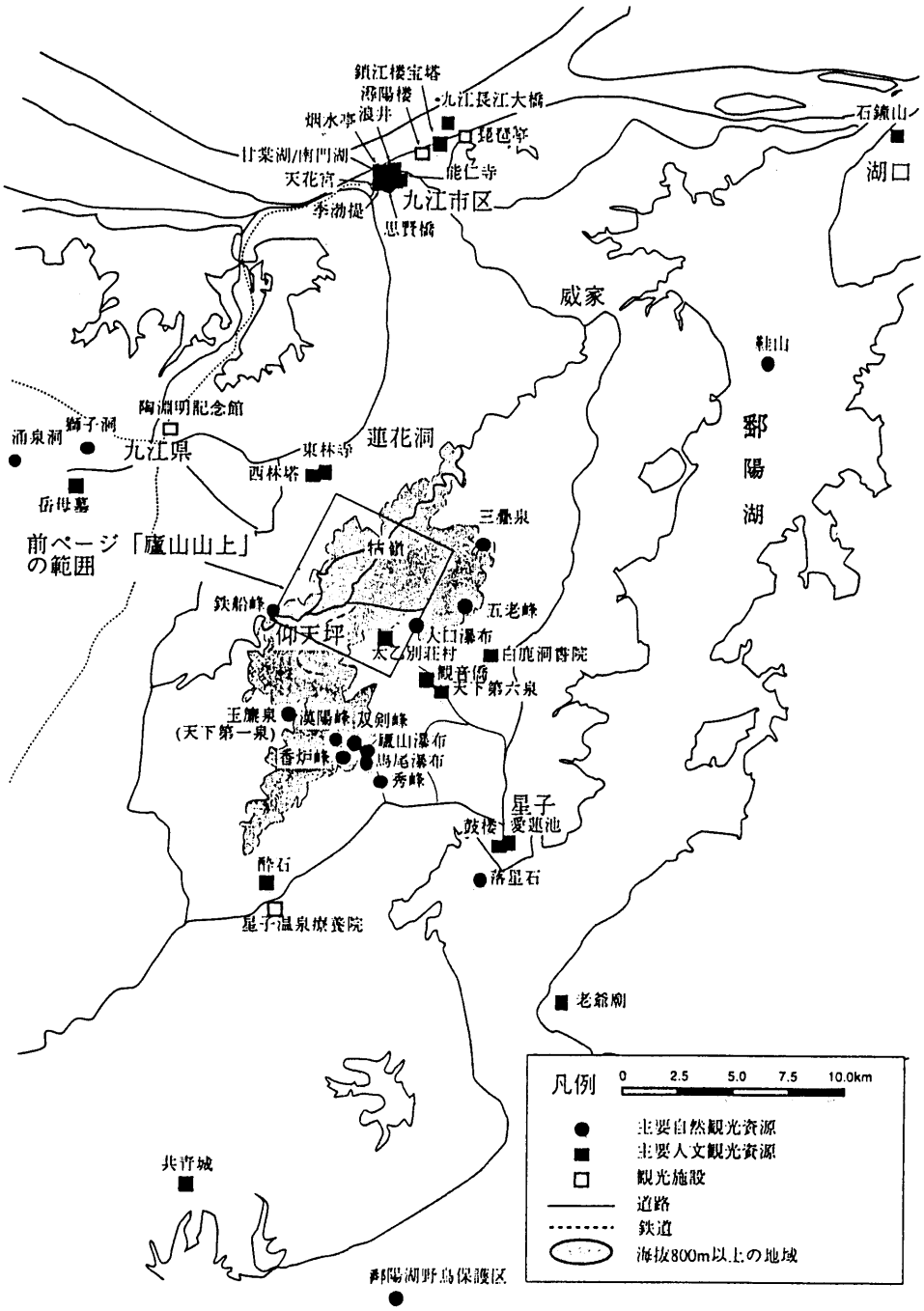


図4　九江市区周辺の観光資源（出典『江西省九江市総合開発計画調査』）

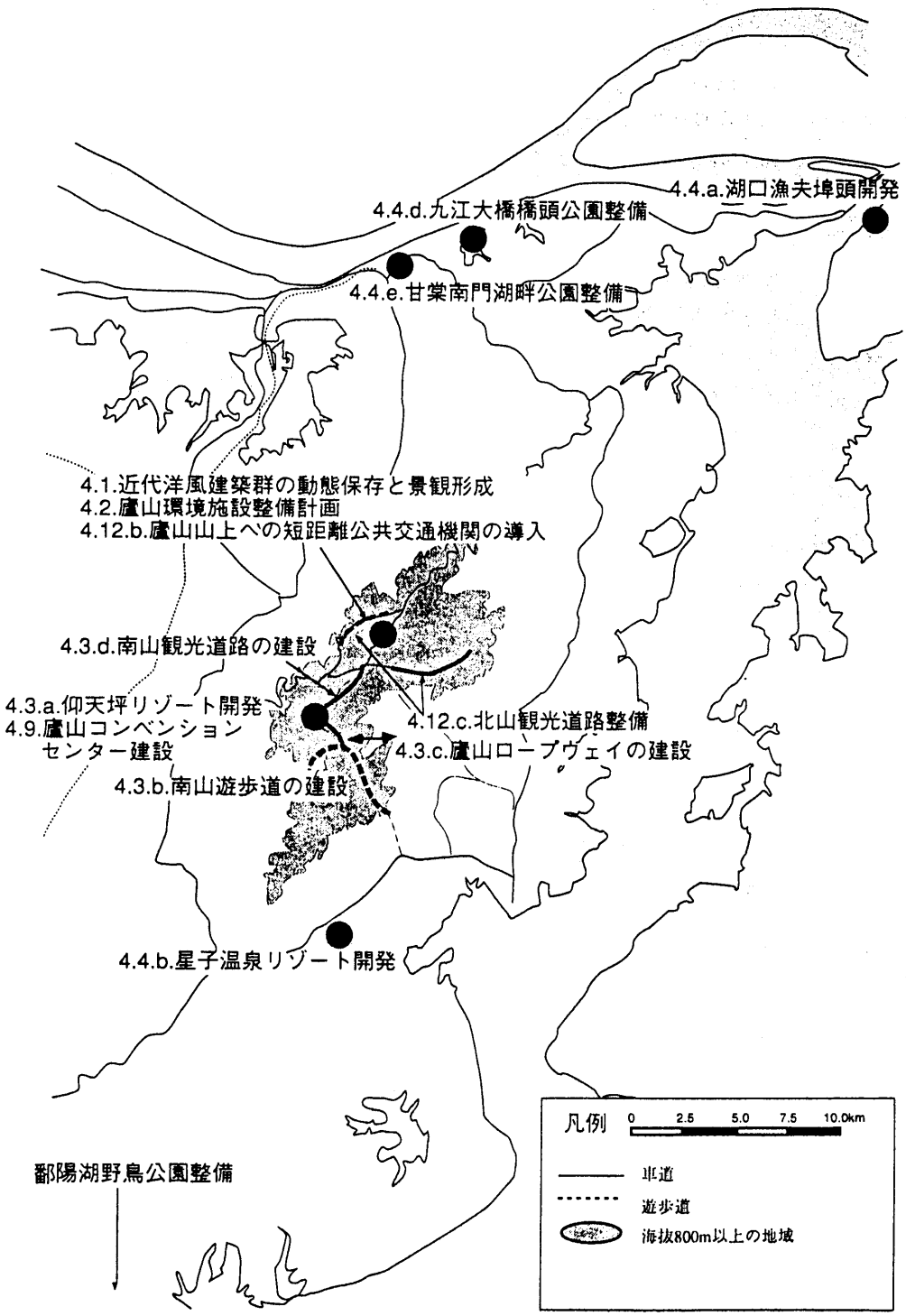


図5　九江市全体の観光プロジェクト／プログラムの位置
(出典『九江市総合開発計画調査』第3巻)

写真1　歴史的な西欧別荘建築群

写真2　奇岩や谷の山道を歩く観光客

な観光行政の機能強化、⑧九江市廬山コンベンションビューローの設立及びコンベンションセンターの建設、⑨外資系リゾートホテルの誘致、⑩観光関連施設のサービス改善、⑪観光交通網の整備、⑫九江大学への観光学科開設。

そしてこれらのプログラムを地理的なまとまりと相互関連性の観点から組み合わせ、2000年までに着手すべき優先プログラムとして、第一に九江廬山コンベンション都市化推進計画、第二に廬山リゾート整備計画をあげている。

このように九江市の「観光計画」の開発フレームと戦略は、観光地としての空間容積の大きさ、また魅力度が高い世界遺産の廬山を中心として提案されている。これがどのように実際に展開されているか、廬山の現状と今後の開発計画を次にみる。

7. 廬山の現状と開発計画

(1) 廬山の観光開発について

廬山経済状況と1990年から5年間の変化は次のとおりである。廬山の経済発展のスピードは非常に速い。1990年と比較してＧＮＰは2倍、ＧＮＰの中で5800万元であり、来訪者数は年間80万人で、消費総額は8000万元になり、1990年の1.5倍に増加している。税収も伸び、年間1800万元で、これも1990年の1.4倍に伸びている。年平均成長率は15％である。この経済・観光の発展は今後もっと早いスピードの発展の基礎を造ったと考えられている。

廬山は九江市郊外にあり、九江市と廬山は一緒に発展することが可能である。九江市は長江と京九鉄道の交差する地点にあり、その意味で九江市の発展は廬山の開発にも大きな影響を持っている。京九鉄道ができたことでの九江市の開発可能性と、もう一つは1996年12月に廬山がユネスコに「世界文化景観」として世界遺産登録されたこと、この2点は廬山の観光発展に大変大きな要になる(廬山画冊編委員会 1994;成云光 1997；九江市旅游局 1995)。

(2) 観光開発の基本的な考え方

以上の観光開発の現状の中で、廬山管理局として2つの基本的な考え方を持っている。第1は持続可能な開発、第2は既存の観光資源の利用をさらに進めることと、観光客拡大を図るために新しい観光資源を開発することである。また第2に、これらのためにインフラの整備をすることである。上水道の供給力、電気エネルギー供給、道路と交通、環境保全の4点である。

(3) 今後10年－15年間の計画

今後10年から15年間の開発の考え方は次のとおりである。廬山の経済発展（ＧＮＰ）

のスピードを15%とし、持続可能な開発の道をたどるために、将来の建設プロジェクトとして観光資源の開発を次のように計画している。

①廬山観光資源開発

持続可能な原理に基づいて、漢陽峰、五老峰、鉄船峰の登山道を建設する。漢陽峰は大変美しい場所であるが、まだ山道のために観光資源として開発されていない。五老峰は李白の有名な詩があり、行った人々は美しさに感心する。また廬山では景観の要の部分である。山下から山上に道を建設する。鉄船峰はすばらしい滝と渓谷がある。山道があるが今はここへ行く観光客が少ないので道が悪くなっているため、もう一度道を建設したい。

次に森林公園を計画している。廬山は森林の占有率が80%であり、植物の種類も多く、原始的な自然が残っている環境にある。森林公園のイメージは、日本で言えば国立公園のそれである。

第3に、別荘の保存。19世紀後半からヨーロッパ、アメリカ、ロシア、日本など世界の別荘の様式が集まっている。1000以上の別荘があり、現在でも約600軒が残っている。これらの別荘は世界文化景観として遺産登録に非常に重要な要素になった。しかし建築年代が古く傷みがでてきており、できるだけ早く保全する必要がある。

②インフラの整備

現在の廬山のダムは144万立方メートルで、水の供給能力は30万トンしかない。現在の廬山の生活用水、工業用水はこれでは間に合わず、毎年60万トンから80万トンの水不足である。100 万立方メートルの貯水ダムを造ることがほぼ決定している。総投資額は3000万元である。

現在総延長35キロメートルの道路は、1980年代に道路の再整備をしたが、廬山への進入自動車が多く傷みが早いこと、また冬季は雪氷の影響で利用期間が短い。そのため冬季でも利用できるような道路の再整備を目指している。(総投資300万元)

水道のパイプラインは総延長30キロメートルであるが、山なので落差が大きく圧力が大きい。そのため旧来の水道管では傷みが多く、早く保全する必要がある。

観光客400人収容のホテルを構想中である。(総投資2億元)　これは九江市市街地と廬山の間に幅員60メートルの廬山大道を直線的に建設し、現在1時間半かかるところを1時間弱に短縮する。この道路に沿って開発区を設け、この開発区の中で旅游局がホテルの建設を計画中である。

現在の電力では供給量が不足しており、供給増を計画中である。江西省計画委員会の同意を既に受けているが、予算不足である。(総投資2000万元)

その他、まだ構想中であるが、ミネラルウオーターや競馬のプロジェクトが考えら

れている。

廬山の水質は高く、世界のミネラルウオーターと比較してあまり差がない。大した技術がかからないため、年間50万本を考えている。

③仰天坪リゾート開発

現在の廬山の観光中心地区は廬山の中でも北山である。世界文化景観に登録されたため、この中心地域では観光客で非常に混雑している。一定の数には制限しているが、今のままでは環境汚染の恐れがある。北山だけでは観光客の需要に間に合わない。この混雑緩和のために1994年江西省人民政府の計画で、廬山南山開発のなかで仰天坪にリゾート開発が計画された。仰天坪リゾート開発では、別荘地区、コンベンションセンター地区、娯楽地区の3つの地区を計画している。娯楽地区は廬山は「昼は楽しいが、夜は寂しい」という観光客の声に対応しようとするもので、面積1平方キロを予定している。

別荘の開発は10ヘクタールで、香港、マカオ、シンガポールの資本が投資して、現在土地を造成中である。最近国内の高額所得層の増加により、高級別荘地をねらいとしている。

8. 「江西省廬山風景名勝区管理条例」と「廬山全体計画」

このまま廬山の開発が進めば、現在でも既に世界遺産登録されたこと、中国の人々の生活水準上がっていることから、さらに観光開発の発展と環境負荷は増大すると予測される。持続可能な視点での観光開発を進めるには、環境保全のための法的措置が必要である。

廬山を管轄する江西省としても、廬山の発展は環境を破壊すればない、との考えに立って、1995年に「江西省廬山風景名勝区管理条例」を制定し、1996年4月18日江西省第八人民代表大会常務委員会第二十一次会議通達として、現在既に施行されている。

また、廬山を全体としてどのように考えていくか、「廬山全体計画」の草案ができあがっている。これは廬山全体の開発計画の中に生活地区、娯楽地区、利用地区に分けて地域開発し、その計画によって美しい自然観光資源は残したいと考えている。「廬山の経済発展は、美しさがなければありえない」と考えられているためである。そのため、環境保全を前提として、開発を進めていくとしている。

9. まとめ

これまで述べてきたことにもとづいて、廬山を持続的観光開発の視点から考察すると、次のような問題と方向が抽出できる。

既存地域の収容力限界と今後の観光客増大による環境負荷と環境容量の調整、外部資本による投機的観光開発の急進性の調整、近代洋風別荘建築群の修復・活用保存へ早急に取り組むこと、全体として環境影響評価の手法を取り入れることである。

国内観光客の増大はさらに続き、先に述べたように、有名観光地の混雑、道路の混雑による渋滞、自動車と歩行者の未分離による危険の増大、駐車場の不足、宿泊施設の不足、上水道の水量不足、汚水の増大、廃棄物の増大がさらに進展すると考えられる。

観光客の増加だけをめざすと、廬山の環境容量をさらに越えて環境負荷が大きくなる。観光客の入れ込み客の開発フレームは、これらのインフラ整備の進展と合わせて設定していくことが必要である。自家用車の利用は今後増えると考えられ、住民以外は山上への利用は高齢者や障害者など必要な場合を除いて、山麓で下車し山上は専用車で回り、歩道を整備するなど制限する方法も考えられる。

上水道を整備すると汚水はさらに増大するため、汚水管理を同時に進行させる必要がある。

北山の過剰入れ込みを解消するため、南山開発の一環として仰天坪リゾート開発が行われているが、外部資本による投機的開発が急激に進むことは危険である。小面積の個人を対象にした別荘は、一時的に資金が回収できる点もあるが、常時多くの観光客が滞在するという可能性は低く、雇用や消費など地域への波及効果は少ない。現在の環境収容力を超える観光客の受け皿としては高級別荘地を一部として、多数の観光客を受け入れる質の高い施設が必要である。土地造成後すぐに建設されないときは景観や山地の保全面から支障が大きく、段階的開発が必要である。

北山の近代洋風別荘建築群の動態保存のための方策が持続的観光開発の要である。別荘建築群は世界遺産登録にあたって重要な要素となっている。しかし、これらの別荘はそれぞれの組織の保養所として使用され、開放されていない。また建築後50年を経て傷みがこれから進むと考えられ、修復して一般的に観光客が利用できるホテルや別荘など高級宿泊施設として再生していくことが必要である。南山のリゾート開発を現代の需要に対応するようむしろ一般化し、別荘建築群のある北山地域は、別荘の再生利用と、廬山会議跡地の博物館や廬山大家を修復して音楽やコンベンションのホールとして利用することにより、その他方策と相まって現在国内観光客がほとんどである廬山を、森林の中に建築群が点在する自然と調和した国際観光地へ脱皮できる可能性がある。

現在標高 800 メートル以上の山上を江西省廬山名勝区管理局が、それ以下の山麓は九江市の管轄に分かれている。周辺風景地は廬山管理局の指導・監督を受けなければならないことになっているが、今後さらに開発が進むと 800 メートル以下での山麓の森林が減少し、全体の景観が損なわれることが考えられる。一体的管理や山麓全体を管理条例の適用範囲とするなど景観保全や景観形成が世界文化景観を維持するうえで重要である。

謝　辞

本研究調査には山陽学園大学国際文化学部の牧野松代氏はじめ、名古屋大学国際開発研究科修士課程（前九江市人民政府計画委員会）の張鴻、中国華中理工大学経済学院徐長生、江西財経大学の伍世安、九江市副市長の程水鳳、九江市計画委員会の周河水、九江市外資弁公室の宋基衛、九江開発区経済発展局の黄金水、同管理委員会の張剣宝、九江港務管理局の閻慧毅の各氏、その他にも実に多くの人のお世話になった。また奈良県立商科大学の李圜巾氏にも中国文献資料の翻訳にあたりお世話になった。これらの方々に心から感謝申し上げたい。その後長江の大洪水により、九江市等甚大な被害を受けられ、その後の復旧を願ってやまない。

文　献

成云光

1997　『京九旅游便覧（京九鉄路地図冊）』湖南地図出版社。

江西省計画委員会

1996　『奔向新世紀的江西』江西省。

江西省計画委員会

1996　『跨世紀的藍図・新長征的指南』（江西省国民経済和社会発展”95”計画和2010 年遠景目標）、江西省。

江西省廬山風景名勝区管理局

1996　『世界文化景観・廬山游』江西省。

江西省廬山風景名勝区管理局

1996　『江西省廬山名勝区管理条例』江西省第八届人民代表大会常務委員会第二十一次会議通達、江西省。

九江市旅游局

1995　『九江旅游発展的規画（1995—2000）』九江市旅游局。

九江市旅游局

1997　『騰飛的九江旅游業』九江市旅游局。
九江市人民政府
1996　『九江投資指南』九江市。
九江市統計局
1996　『九江経済統計年鑑』中国統計出版社。
国際開発センター
1994a　『全体計画』中華人民共和国江西省九江市総合開発計画調査 第1巻　財団法人国際開発センター。
国際開発センター
1994b　『工業計画』中華人民共和国江西省九江市総合開発計画調査第2巻　財団法人国際開発センター。
国際開発センター
1994c　『観光計画』中華人民共和国江西省九江市総合開発計画調査第3巻　財団法人国際開発センター。
国際開発センター
1994d　『流通計画』中華人民共和国江西省九江市総合開発計画調査第4巻　財団法人国際開発センター。
国際開発センター
1994e　『交通計画』中華人民共和国江西省九江市総合開発計画調査第5巻　財団法人国際開発センター。
国際開発センター
1994f　『都市環境計画』中華人民共和国江西省九江市総合開発計画調査第6巻　財団法人国際開発センター。
国際開発センター
1994g　『人材開発計画』中華人民共和国江西省九江市総合開発計画調査第7巻　財団法人国際開発センター。
廬山画冊編委員会
1994　『廬山』中国海風出版社。
日中上海・長江ー神戸・阪神公益促進日本委員会
1996　『上海・長江促進プロジェクト調査研究報告書』日中上海・長江－神戸・阪神公益促進日本委員会。
王明善、洪礼和
1996　『跨世紀的藍図』（江西省国民経済和社会発展'95 計画 2010 年遠景

目標綱要補完材料）新華出版社。

魏朝卿

1993　『万水千山総是情』東方文化出版社。